

## 6. 「他者のいたみ、気づきの中で自分の個性を知る いたみの作品から、自分も何かしよう」

私の著書『いのちの絵から学ぶ』では、私のやってきた「3.11 を忘れない命の授業」のことも詳しく紹介しています。

真似したり、この資料、絵をもとに行う命の授業に興味がある先生方にもご覧いただけたらと思っています。

## 7. 「絶望が希望へつながる」

授業で紹介する絶望の絵「牧場 ペガサス」という左右15mの大作や「福島の母」という絵には、希望があると思います。

なぜなら、「福島の動物はこんなふうに残ったのか。知らなかった自分が恥ずかしい。なんとかしたい。自分ができることはなんだろう」と学生たちが気が付くきっかけになったからです。

福島での個展を重ね、新潟、沖縄、広島というテーマにも広げていったのですが、真っ黒でした。

「広島は守られた記憶、福島は忘れ去られようとする記憶だ」と言ってくれる子もいました。

子どもたちは、他者のいたみに対しても敏感に感じ取っているのです。

自分だけ成績が良ければ良いという長く苦しい受験勉強とは違い、お互いの違いを認識しあいながら作品を前に講評しあうグループトークなどは、ともに良くなっていくような作業であるといえます。自分の個性を発見するきっかけにもなるかもしれません。

世界では戦争や様々な問題、そして日本では福島の問題、たくさんのいじめの問題もあります。生きづらさが言えない子どもたちに、自分の弱さを見つめて動物になってみたり、私の疑似体験をしてもらって、サイクルを実感してもらえて、ワークショップで個性を放つことを通じ、希望を感じてもらえればと思っています。

## 8. 「絵描きとしてのいたみ」

私は団体展ではプロパガンダになったと呼ばれ、絵画業界を汚すなどまで言われてきました。いじめられ、私は、もういい、団体展は辞めると、個人での個展で新しい道を切り開いてゆくことを決めたのです。このエピソードは、いじめに敏感な学生にも、大変共感と感動の感想を貰っているシーンです。

## 9. 「弱い者のつくる作品が自分と世界(自然)を変える」

広島のある学生さんが、私の「ふたつの太陽」をみて、感想を言ってくれました。

「あらゆる核災害の被爆者がこれ以上ないほどの苦しみを経験した挙句、生涯十分な補償を受けられないで亡くなっていくように、権力を持つ人だけがそれを享受し続け、被害者が被害者の枠に閉じ込められたまま慎ましく生きることを強いられる側面の強い現代社会への違和感が私の文学を学びたいと思う原動力になっています。なので、今回核の悲惨さ、そして権力構造の枠を超えた生命として生きることの純粋な喜びを描かれた山内さんの作品の迫力と説得力を目の当たりにし、お聴きした現実の凄惨さに打ちのめされながらもとても力を貰いました。」

私は今、表現者が、ありとあらゆる自分の「作品」をつくる人こそ、変わるべき時代にいると思います。理数系の方であろうと、次世代に届けるのは心ある作品である、世代を超えて、命のために自分の能力を使い、良心に問いつつ作品を届けられているか、問う時だと思います。

絵は時空を超えて未来を良い意味で形象化できます。過去の過ちを指摘し、今を描き、未来への指針も理想も、キャンパスの中に創出できます。その解決策さえ提示できます。私は福島の天井画で、物語を長編小説を構築するように描きました。

人間、自然、労働。これはすべての絵画に言えることなのですが、絵は思想の発露でもあります。でも、自分の持つメッセージを超えて、観てくれた人数分の物語として、世界に広がってゆく表現でもあります。それは時に言語を超え、人の受けた感情の記憶を伝えてゆきながら、戦争や原爆、原発事故を二度と起こさないという感情を、体験していない世代の人に届ける事もできます。

絵は絶望を希望に変えることができます。

## 10. 「NY 核兵器禁止条約締約国会議場 展示」

最近では、私の描いた被ばくした船の金屏風8隻が、3月3日から7日間アメリカ・ニューヨーク国連本部で開かれた核兵器禁止条約の第3回締約国会議場にて展示されました。

1954年、第五福竜丸以外にもたくさんの船がビキニ事件で被災し、被ばくしました。胡粉と墨の匂いを含め感じて欲しいです。死の灰は砕けたサンゴ礁に放射性降下物が付着したものです。日本画の胡粉はカキやホタテの貝殻を粉砕したものです。キラキラと光る画面。飛び出しているものもあります。漁師たちの苦しみは「こんなもんじゃない」のではないかと想像したからです。この金屏風と言うキラキラと光る世界、人はその手でままたらないものをつくってしまった、それを多様に光る金屏風に描き、今あるように生々しく感じてもらえたらと思います。黄金色と言う黒に対しての補色に対し船を縁取る黒線が際立つように、そこにあるんだという存在感を示しています。名前のある船は、その後苦しみ続けている漁師さんたちの叫び、その隠喩です。各国のとくに若い方が、知らなかったと、インスタチェックするとコメントをくれたり、驚いていました。

## 11. 「パグウォッシュ会議での展示」

今年の、広島で開かれる11月1日から始まるパグウォッシュ会議場・広島国際会議場でも、展示が決まっております。三部作とふたつの太陽が大きく展示される予定です。

どんなときも、何を描くときも、私のはじまりは、最も小さい声、命の発露。そんな絵を描き発表し続ける。場と共に成長してゆきたいです。

私は会社のために働き続けてきた。15年+派遣人生も3年ほど、奨学金を返すための学生時代バイト掛け持ち人生でした。

私は自分の遺伝子を残したくないと思っている、いやむしろできない立場の持たざるものです。

でも、個性、個人の尊厳。思想の発露。私は、持たざる者が持つ時代の幕開けの光を見たいと思います。一緒にその希望を覗いてみませんか。



津田塾大学創立125周年記念 山内若菜展にて

## プロフィール

1977年神奈川県生。  
1999年武蔵野美術大学短大専攻科美術専攻修了。  
以来国内外で個展、グループ展を中心に活動。  
2007年より文化交流コムソリスで個展を開催継続。  
東日本大震災後の2013年より、福島県内の被ばくした牧場での取材を開始する。  
2016、2021年原爆の図丸木美術館（埼玉）で個展。  
2016年から中学校、高校、大学などで命の授業・展示講演会開催  
2017年ロシア国立極東美術館（ハバロフスク）で個展。  
2021年東山魁夷記念日経日本画大賞展入選。  
2022年平塚市美術館常設展特別出品。  
2024年 旧日銀広島支店個展、第五福竜丸展示館個展  
2025年津田塾大学にて展覧会開催  
著書「いのちの絵から学ぶ 戦争・原発から平和へ」  
山内若菜 絵・文 彩流社